The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「クロノトポス」について ： コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察
Author(s)	榎本, 剛士
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88411
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「クロノトポス」について
―コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察―

榎本　剛士

１．はじめに：コミュニケーション分析と時（クロノ）空間（トポス）

言語などの記号に媒介された社会・文化的コミュニケーションの分析においては、生起する諸々の記号とコンテクストとの間の（指標的）関係・相互作用を照らし出すための枠組みが要請される。理論上、コンテクストは無数に存在し、コミュニケーションに実際に結びつけられるコンテクストにも様々な要素が含まれ得るが、コミュニケーションが必ず「いつか」、「どこかで」起こることを考えれば、「時間」や「場所」に関わる要素がコミュニケーションに関与するコンテクストの重要な一部を占めていることは言を俟たないだろう。

では、コミュニケーションを分析するにあたり、どのような概念を用いれば、「時間」や「場所」に関わる要素を有効に射程に収めることができるのだろうか。そこで、近年の言語人類学において着目されている概念が、ミハイル・バフチンに由来する「クロノトポス (chronotope)」である[1]。「クロノトポス」の字義的な意味は「時空間」であり、それは「時間」と「空間」との間の本質的な繋がりを表している。「クロノトポス」を巡っては、Anthropological Quarterly 誌（2015 年）、Signs and Society 誌（2019 年）、Language & Communication 誌（2020 年）といった学術誌において特集が組まれ、2021 年に出版された The International Encyclopedia of Linguistic Anthropology にも、“Chronotope” と題されたエントリーが収録されている (Perrino 2021)。また、数はそれほど多くないが、「クロノトポス」を援用して現代の日本社会における事象を分析した研究も出てきている（榎本 2019, 片岡 2022, Nozawa 2015）。今後、主に言語人類学、語用論、社会言語学、文化人類学に従事する研究者たちによって、「クロノトポス」概念を駆使した社会・文化研究、コミュニケーション研究が日本でも展開されていくことが予期される。

本稿の目的は、筆者自身がこれまでに「クロノトポス」を援用した研究を試みる中で出会ってきた定義や解説、再解釈を一旦、まとめることにより、「クロノトポス」とは何か、「クロノトポス」を援用することでコミュニケーション過程のどのような側面を分析の射程に収める（言語化する）ことができるのか、といった理論的な要点に関する基礎的理解を（再度）得ることである。そのことを通じて、これから「クロノトポス」を援用した研究を始める、あるいは、すでにそのような研究を行っており、さらに研究を深める、いずれの場合に当てはまる研究者に対しても、何らかの一助となる知見を提示することを目指したい。

２．「クロノトポス」とは何か

2.1 Bakhtin（1981）における定義

「クロノトポス」は、文芸批評、哲学、心理学、記号論など、多岐に亘る分野で重要な仕事を残したミハイル・バフチンによる概念である。では、バフチン自身は、「クロノトポス」についてどのような記述を行っていたのだろうか。The Dialogic Imagination 所収の “Forms of time and of the chronotope in the novel: Notes toward a historical poetics” (Bakhtin 1981) を訪ねてみよう。

[1] 「クロノトポス」の他に、「クロノトープ」という表記もあるが、本稿では一貫して「クロノトポス」を用いる。

「クロノトポス」を論じるにあたり、バフチンは、ヘリオドロスの『エティオピア物語』、アキレウス・タティオスの『レウキッペとクレイトポン』、クセノポンの『エペソス物語』などの「ギリシャ小説」をまず取り上げている。これらの物語には、以下のような、典型的な物語の展開が見られる。

- 美男と芳紀純潔な年ごろの美女が「予期せず」出会う。
- 出会った「瞬間」、二人の間に、運命のように抗し難い、不治の病のような、「突然の」情熱が燃え上がる。
- 二人の結婚は一筋縄ではいかず、二人はそれを「妨害する」数々の障害に直面する。
- 二人は「離れ離れ」になり、互いを捜し求めて広範にわたる場所を彷徨い、再会と別離を繰り返す。
- 二人は「親の反対」、「難破」、結婚式前夜の花嫁の誘拐、「監禁」、「海賊」による襲撃、冤罪など、降りかかってくる様々な障害を乗り越え、苦難から逃れる。
- 予期せぬ友や敵との出会い、予知夢、預言（者）、予兆が重要な役割を果たす。
- 障害と苦難を克服した二人の男女は、最後に夫婦として結ばれる。

このような典型的な展開を見せる「ギリシャ小説」の「クロノトポス」に対し、バフチンは「冒険の時間の中の異世界 (an alien world in adventure-time)」という名を与えた。その特徴は、次の通りである。

- 「二人の男女が突然、互いに情熱を燃やす」という出発点、「二人が結婚して結ばれる」という終着点の「間」で全てのアクションが起こる。
- この「間」に何が起きても、いかなる試練によって試されても、二人の「愛」は変化せず、それが疑われることもない。
- 激しい紆余曲折にもかかわらず、それは「愛」に影響を及ぼすことはなく、二人の性格や人格 (personality) にも痕跡を残さない。
- このような「冒険の時間」は、「日常」（日々の具体的な生活や（人・ヒトとしての）成長から成る人生のサイクル）から完全に遊離し、「偶然」や「運」(chance) によって支配される。
- 様々な「試練」は広範な場所で（海を隔てたいくつかの国をまたいで）起こるが、その場所の具体性（社会のあり様や政治形態などの詳細）は、出来事の生起に全く貢献しない。

上記のように特徴づけられる「ギリシャ小説」の「クロノトポス」は、抽象的で静的な時空間であり、それが、社会性や政治性を持たない「完全に個人的」な「登場人物」のイメージの基盤となっている。

さて、「ギリシャ小説」の例を踏まえたうえで、バフチンによる「クロノトポス」の定義は、下記の通りである。

> We will give the name *chronotope* (literally, “time space”) to the intrinsic connectedness of temporal and spatial relationships that are artistically expressed in literature.

バフチンが論じるところによれば、「クロノトポス」とは、文学において芸術的に表される、時間的・空間的関係の本質的な繋がりの謂いである。それは、文学の形式的に構成的な (formally constitutive) カテゴリーであり、そこにおいて、空間的、時間的標識は、一つの注意深く考え抜かれた、具体的な全体に融合する。時間は厚みを持ち (thicken)、肉づけされ (takes on flesh)、芸術的に可視化されるとともに、空間もまた、時間、プロット、歴史的な性格を帯び、それらに対して敏感となる。このような「クロノトポス」は、本質的にジャンル的な重要性を持ち、それゆえ、ジャンルやジャンル間の区別を定義するものこそが「クロノトポス」である、と言える。形式的に構成的なカテゴリーである「クロノトポス」が、かなりの程度、人間（登場人物）のイメージを決定する限り、人間のイメージは本質的に「クロノトポス」的である。

以上、バフチン (Bakhtin 1981) による記述を追いながら、形式的に構成的なカテゴリーとしての「クロノトポス」をまず、見た。次項において、バフチンに関する研究を紐解きながら、「クロノトポス」についての基本的理解をさらに進める。

2.2 Clark & Holquist (1984)、Morson & Emerson (1990) から

前項において、まず、ジャンルやジャンル間の区別を定義する形式的に構成的なカテゴリーとして、「クロノトポス」を理解した。さらに、Morson & Emerson (1990) が指摘するところによれば、ジャンルには、出来事のパラメーターを決定する特定の「フィールド」のようなものがあり、そのような「フィールド」を特定することはすなわち、「クロノトポス」を特定することに他ならない。

Morson & Emerson (1990) は、（アインシュタインとの比較で）バフチンの「クロノトポス」を五つの点から特徴づけている。

1. 「クロノトポス」において、「時間」と「空間」は本来的に繋がっている（「クロノトポス」は、時間と空間が融合した (fused) 感じを明確にする）。抽象的な分析において、時間と空間を分けることはできるが、そのような分析には、「クロノトポス」の本質を歪めてしまう危険性がある。
2. 「時間」や「空間」の意味には多様性がある。特定の「クロノトポス」は、絶対的なものではなく、多くの可能性の中の一つに過ぎない。(We live in a universe of “heterochrony”.)
3. 宇宙の異なる側面や秩序は、同一の「クロノトポス」において作用することはできない。（例えば、生物体は、天体とは異なるリズムの内にある。）
4. 多様な、複数の「クロノトポス」が存在するということは、「クロノトポス」そのものが可変的で、（潜在的に）歴史的であることを意味する。それぞれの「クロノトポス」は、互いに競合 (compete) し、「対話的 (dialogic)」な関係にある。
5. 「クロノトポス」は、行為・実践において、目に見えて「そこにある」というよりも、行為・実践のための「土台 (ground)」である。つまり、「クロノトポス」は、世界において「表象される (represented)」のではなく、出来事の表象可能性 (representability) にとって不可欠な基盤を成す。

これらの記述が示唆するように、「クロノトポス」概念自体が持つ射程の応用可能性は、文学に限定されるものではない。むしろ、Clark & Holquist (1984) が論じる通り、バフチンが文学（様々

な小説のジャンル）に焦点を当てて「クロノトポス」、すなわち、時間と空間の本来的な繋がりを論じる時、そこには、意識の歴史 (history of consciousness)、精神 (mind) による経験の組織化といった、哲学的な問題が横たわっていることに留意する必要があるだろう。

３．言語人類学者たちによる再定義

前節では、バフチン自身による記述とバフチンに関する研究を紐解きながら、「クロノトポス」、および、その（広範な）射程に関する基本的な理解を得た。第 1 節で述べた通り、バフチンによる「クロノトポス」概念は、近年、言語人類学の社会・文化研究、コミュニケーション研究において、積極的に援用されている。本節では、言語人類学者たちによる「クロノトポス」の捉え方、概念の発展のさせ方を見ていく。

まず、De Fina & Perrino (2020) が整理するところによると、バフチンの「クロノトポス」を発展させた（言語人類）学者たちは、1)「クロノトポス」的な表象において、時／空間と役割 (personae) は繋がっていること、2) それが実際に具現化されるコミュニケーションにおいて、「クロノトポス」的な表象は常に変化すること、3) 「クロノトポス」的な表象は、共有された知識、イデオロギー、価値体系を通じて、歴史的な過程と深く結びついていること、以上の点を（異なる程度で）強調してきた。

Blommaert (2015) は、バフチンの「クロノトポス」を、「喚起可能な歴史」、「時間、空間、エージェンシーのパターンが合致し、意味や価値を生み出す精巧なフレーム」と言い換え、特定の時空間フレームにおいて有効な指標性の秩序 (orders of indexicality) を呼び起こすもの、としている (Blommaert & De Fina 2017)。

Silverstein (2005) によれば、記号論的な産物としてのディスコースにも、それが社会的に組織化される時間と空間を循環する (circulate) 何かとして概念化できるという意味において、「クロノトポス」的な性格が看取される。ある特定の場で生起する、言語などの記号を媒介とした相互行為と、それとは異なる時空間的「包み (envelope)」で生起する／した相互行為との間に繋がり・関係が生まれるとき、それらの相互行為は同じ「クロノトポス」的フレームの中に引き入れられる、と考えることができる。さらに、Silverstein (2016) は、「クロノトポス」とは、時間的・空間的な包み (envelope) のようなもので、その「語られた世界」に住まう登場人物たちは、当該のフィクションの世界における（社会的）存在として、展開する利害（関係）の「筋書き化」された軌跡に沿って相互行為を行うものと理解される、としている。（我々個々人が実際に経験する社会生活も、このような「クロノトポス」的な様相を本来的に呈していると考えられる。）

同様に、Wirtz, (2014) が概念化するところによれば、「クロノトポス」的フレーム、および、それを生み出す実践は、私たちが私たち自身、および、他者を何らかのアイデンティティのカテゴリーに合致する（社会的に認識可能な）人として特定する経験を具現化する。このようなプロセスにおいて、アイデンティティは「抽象物」以上のものとして、社会的な相互行為を通じて私たちが就く(inhabit)、遂行的でクロノトポス的な創造物として位置づけられる。

あらゆる「クロノトポス」的表象における二つの重要な側面を指摘するのが、Agha (2007) である。「クロノトポス」的表象は、時間を場所と人格 (personhood) に結びつけるが、それはコミュニケーションの「参与枠組み」において経験される。「クロノトポス」的表象を生み出したり、構成したりすること自体が、「クロノトポス」的に組織化され、そのような行為が、「クロノトポス」に変容をもたらすこともある。そうした変容は、分かりにくかったり（意識的に把握することが

難しかったり)、その重要性にも程度の差があったりするが、それは常に「参与枠組み」の中で展開する[2]。

Hartikainen (2017) は、コミュニケーションの参加者が喚起する「クロノトポス」が、他の「クロノトポス」と無関係には存在していないことを論じている。上記、Silverstein (2005) の記述にもある通り、一つの「クロノトポス」は、他の「クロノトポス」との「間ディスコース」的 (interdiscursive) な繋がりや対照化を通じて、その形を獲得する。そして、特定のコミュニケーションにおいて喚起された特定の「クロノトポス」は、他の「クロノトポス」と「間ディスコース」的に結びつくだけでなく、それを喚起するコミュニケーションそれ自体の「クロノトポス」とも対話的 (dialogic) な関係を結ぶことになる。

このように、言語人類学者たちによる再定義が示すところは、「クロノトポス」的な構築・定式化が、社会的生活の時間的・空間的な展開を解釈し形作るメタ記号的な枠組みであり、時間、空間、社会性、人格の経験を可能にする、ということである (Nakassis 2016)。「クロノトポス」は、時間・空間・人格の形態をメタ記号論的に投影することで、今・ここで展開する記号作用を媒介する[3]。そして、「クロノトポス」それ自体も、社会的な時間・空間において、様々な記号論的な実践（特に、時間、空間、人格への再帰的なアラインメントや、「クロノトポス」的なはたらきかけ）を通じて現れる、弁証法的なプロセスの中にある。

４.「クロノトポス」概念の援用に際して

ここまで、バフチン自身による記述と、バフチンに関する研究における解釈を経て、言語人類学者たちによる「クロノトポス」の再定義・再解釈を見てきた。前節までに確認したことを踏まえて、「クロノトポス」概念の援用に際し、どのようなことを考えることができるだろうか。本節では、この概念をより「我が物とする (appropriate)」ために、さらに考察を進めてみたい。

4.1 「クロノトポス」概念の根底にある新カント主義的構図

まず、2.2 で述べた通り、「クロノトポス」の射程は、文学研究に限定されず、より広範な哲学的問題と結びつていることを押さえることが肝要であると思われる。繰り返すと、バフチンが文学（様々な小説のジャンル）に焦点を当てて「クロノトポス」、すなわち、時間と空間の本来的な繋がりを論じる時、そこには、意識の歴史 (history of consciousness)、精神 (mind) による経験の組織化といった、哲学的な問題があった (Clark & Holquist 1984)。このような哲学的な問題設定の源泉にあるのは、カント、および、新カント主義者たち (Neo-Kantians) の思想であった (Clark & Holquist 1984, Holquist 2010)。

新カント主義は、カントに端を発し、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、マックス・ウェーバー、ディルタイ、ボアズ、サピア、リッカート、カッシーラー、ジンメルらによっても共有されていた思想的潮流である（小山 2014）。小山（2014）がジンメルについて論じる中で示す新カント主義的な構図とは、「Geist/Natur、（カント的「構成力」に由来する）魂・精神／自然・身体、形式／実用・機能、内的／外的なもの、理念／現実、芸術・人間／世界・物、idiographic/nomothetic sciences、統一性・唯一性・個性／普遍・一般性、直観と表層／法則と深層、以上のような対照ペ

[2] Agha (2007) によれば、マス・メディアの場合、「クロノトポス」が展開する参与枠組みの数（規模）が大きいため、人の集団 (mass) が社会的な関連性 (relevance) を持つようになる。
[3] この意味において、Nakassis (2016) は「クロノトポス」と「言語イデオロギー」の類似性を指摘している。

アから成る、いわば二つの世界（社会文化と自然）、これら、それぞれ独自の原理から成る二つの相の『存在』を前提としたうえで、しかし他方で、両者の間にまさしく『繋がり』、相互依存や相互浸透があるという点にも注意を払い、この相互的な原理的独自性と相互依存・浸透との両立を梃子として、両者を含みこんだ、より大きな統合、すなわち、生命＝全体を据えるという構図」である。

前節までの記述を通じて、「クロノトポス」がこのような「構図」を共有していることは明白ではなかろうか。カントとは異なり、バフチンは「時間」と「空間」を「超越的 (transcendental)」なものではなく、「最も直接的なリアリティの形式 (forms of the most immediate reality)」として捉えている (Bakhtin 1981)。上述の通り、「クロノトポス」は形式的に構成的なカテゴリーであることから、それは（パース記号論的に言う）「象徴記号」としての性格を有するものである。同時に、バフチンは、融合した全体を成す具体的な、肉づけされた (take on flesh) ものとしても「時空間」を捉えている。このような理解は、上に示した「相互的な原理的独自性と相互依存・浸透との両立を梃子として、両者を含みこんだ、より大きな統合、すなわち、生命＝全体を据えるという構図」と一致する。この点が、「クロノトポス」概念の哲学的な勘所であると思われる。

4.2 「語られる出来事（narrated event）」と「発話出来事（speech event）」

次に確認したい点が、「語られる出来事 (narrated event)」と「発話出来事 (speech event)」の区別と、「クロノトポス」との関連である。「語られる出来事」と「発話出来事」の区別は、ロマーン・ヤコブソンがコミュニケーションに投錨された形で文法範疇を特定する際に設定した区別である (Jakobson 1971 [1957])。その中で、「発話出来事」との関連で特定された「転換子」と呼ばれる範疇（人称、時制、法など）は、言語とコンテクストとが実質的に結びつくところであり[4]、言語人類学や語用論、社会言語学の中でも極めて重要な位置にある。

文学、特に小説を研究するために援用される「クロノトポス」は、まずもって、「語られる出来事」に関わるものとして考えられる。このことは、上に示した「ギリシャ小説」の例を想起すれば、明らかだろう。しかし、言語人類学における再定義が十全に示す通り、特定の「クロノトポス」を基盤とする語り（「クロノトポス」的表象）を行うことそれ自体に、つまり、そのような「発話出来事」に、「クロノトポス」、すなわち、時間・空間・人格に関する特定の形態が、メタ記号論的に投影されることを見逃してはならない。

実際、このことは、バフチン自身によって指摘されている。“Forms of time and of the chronotope in the novel: Notes toward a historical poetics” に後に追記された箇所において、著者 (author)、聞き手 (listeners)、読み手 (readers) もまた、それぞれ異なる「クロノトポス」に位置づけられることが明確に述べられている。

このことを論じる際のバフチンの（今で言う）語用論的・コミュニケーション論的な発想は特筆するに値するだろう。著者、聞き手・読み手といった「本物の人々 (real people)」は、しばしば異なる時空間に（場合によっては、数百年の時間、遠い空間を隔てて）位置しているが、彼らは皆、テクストにおいて（「語られた出来事」において）表象された世界からは明確に、範疇的に区別された、リアルな、未完ではあるが統一された歴史的世界にいる。このリアルな世界が、テクストを生み出す世界であり、そのようなテクストの生成に関するあらゆる側面（テクストに反映

[4] ヤコブソン言語学的な言葉遣いを必ずしもしていないが、Bakhatin (1981) からは、このような点への洞察を読み取ることができる。

されているリアリティ、テクストを生み出す著者、テクストの演者、テクストを再現することで更新する聞き手・読み手）に、著者、聞き手・読み手は同等に関与している。このような、私たちの世界の実際の「クロノトポス」から、作品において表象される世界の「クロノトポス」が生み出されるのである。

こうした、著者、聞き手・読み手の「クロノトポス」を射程に収めるバフチンの「クロノトポス」は、紛れもなく、コミュニケーションに投錨されたもの、コミュニケーションの中から、コミュニケーションを通じて生まれてくるものである[5]。

4.3 鍵概念としての「相互行為のテクスト」

「クロノトポス」が、そもそもコミュニケーションに投錨されたものであり、「語られた出来事」と「発話出来事」との間を繋ぐ（媒介する）ような性格を有するとするならば、そこに深く関わる言語人類学的な概念は何であろうか。最後に、「クロノトポス」的な洞察における（言語人類学からの）鍵概念として、Agha (2007) に倣いつつ、「相互行為のテクスト (interactional text)」を挙げておきたい。

コミュニケーションは、生起する様々な記号を媒介として、コミュニケーション参加者同士、および、参加者とコンテクストとを関係づけ（結びつけ）ながら進展する。その際に刻まれる、コミュニケーション参加者たちの間に現れる関係づけ（結びつき）の含意や帰結、相互行為の構造、つまり、「為されていること」に関するテクスト（解釈）が、「相互行為のテクスト」である (Silverstein 2007)。

このような定義を踏まえた時、「クロノトポス」は、特定の「相互行為のテクスト」の軌跡を内在化した、時間的・空間的な包み (envelope) である、とも考えることができるように思われる。現に、バフチンが「冒険の時間の中の異世界 (an alien world in adventure-time)」と名づけた「ギリシャ小説」の「クロノトポス」は、コミュニケーション参加者たちの間に現れる関係づけ（結びつき）の含意や帰結、相互行為の構造、「為されていること」に関するテクスト（解釈）の生成を根底で支えるものではなかったか。

また、Silverstein (2005) は、「ある特定の場で生起する、言語などの記号を媒介とした相互行為と、それとは異なる時空間的『包み (envelope)』で生起する／した相互行為との間に繋がり・関係が生まれるとき、それらの相互行為は同じ『クロノトポス』的フレームの中に引き入れられる」としているが、そもそもこのような「間ディスコース」的な「繋がり」は、いかにして可能となるのか。「間ディスコース性」とは、特定の出来事の参与者の視点から投射される、出来事と出来事との間の指標（指し示し）関係、「つながり (connectedness)」のことであり、その根本原理は、異なる出来事間の「類像性 (iconicity)」である (Silverstein 2005)。特定の出来事・相互行為と、それとは異なる時空間的「包み (envelope)」で生起する／した相互行為との間に、類似した「相互行為のテクスト」が認められる時、両者は互いに互いを強く指し示し合うような、強固な並置関係の中に置かれ、そのことが、両者を同一の「相互行為のテクストのモデル」を基盤とした時空間（すなわち、「クロノトポス」）の内に位置づける、このようなプロセスを、「相互行為のテクスト」を鍵概念に据えることで、より鮮明に照射することができるのではなかろうか。

このことを踏まえて、筆者なりの「クロノトポス」の定義を試みるならば、それは、「少なくと

[5] このような理解を基本に据えることで、第 3 節で示した様々な言語人類学的定義・展開を捉えやすくなるのではなかろうか。

も一つの『相互行為のテクスト』の軌跡 (trajectory) が（イデオロギー的に）ビルト・インされたコミュニケーションの場」といった形になろう。

５．おわりに：使用前と後によく振る（Shake Well Before AND after Using）

以上、本稿では、バフチンに由来し、近年の言語人類学において特に歴史、および、時間と空間との間の分かち難い結びつきに光を当てるコミュニケーション分析を行う際に援用される「クロノトポス」概念について、バフチン自身による記述、バフチンに関する研究における解釈、そして、言語人類学者たちによる再定義・再解釈を追いながら、理論的な基礎考察を行った。極めて抽象的な記述に終始してきた感は否めないが、「クロノトポス」が、言語人類学が精緻に理論化してきた「コミュニケーション」、および、「メタ語用」の諸側面を同時に射程に収める可能性を秘めた概念であることは、確認できたと考える。

最後に、今後の課題としても位置づけられる問題に言及して、本稿を閉じることとしたい。

上述の通り、バフチンによる「クロノトポス」という問題設定の背後には、高度に哲学的な問題がある。特に、「時間と空間が融合した感じ (a "*fused*" sense of time and space)」、形式としての「クロノトポス」がもたらすリアリティの直接性、「完全に統合された時間と空間の感じが形作る現実感覚 (sense of reality)」(Clark & Holquist 1984) といった問題に、本稿では全く切り込むことができなかった。「クロノトポス」が、コミュニケーションを取り巻き包含する時間的、空間的「コンテクスト」の一部（に過ぎない）、という位置づけを被ってしまうと、（バフチンが恐らく問うていた）「人間」や「世界」のあり方の根源にある、「クロノトポス (chronotope)」としか名付けようのない、しかし、「時空間」と言ってしまった瞬間に私たちの理解の網目を擦り抜けていってしまうような何かが、いつの間にか後景化してしまう可能性を少しは疑ってもよかろう。

これらの問題に切り込んでいく際のアプローチとして、歴史や場所に対する主観的な感じ (subjective *feel* for history and place) (Wirtz 2016)、文化的に概念化された感覚的質感の具現化としての「クオリア (qualia)」(Harkness 2014) が有効かもしれない。また、このような営為においては、Silverstein (1993) による「メタ語用的ディスコース」と「メタ語用的機能」の理論化が、再び重要な道標となると考えられる。

バフチンの「クロノトポス」を「時空間」と言ってしまう時、そこには不可避的に、「時間」や「空間」に対するステレオタイプが入り込む。しかし、肝心の「時空間 (chronotope)」という言葉で指し示されている何かは、実は、私たちが抱いている「時間」や「空間」に対するステレオタイプからは大きくかけ離れたところにある何かであるかもしれない。バフチンが文学（小説の様々なジャンル）を研究する際に提示した「クロノトポス」、その根底にある哲学的な問題設定、言語人類学におけるコミュニケーション論的再定義・再解釈、そして、これらを束ねる根本原理としてのパース記号論、全てを総動員した思考と言語化が、本稿がここから進んでいくべき道であることを認識して、ひとまず、本稿の「理論的基礎考察」を終える。

参考文献

Agha, Asif (2007) "Recombinant selves in mass mediated spacetime," Language & Communication 27(3), 320-335.

Bakhtin, Mikhail M. (1981) "Forms of time and of the chronotope in the novel: Notes toward a historical poetics," The dialogic imagination, ed. by Michael Holquist, 84-258, University of Texas Press, Austin,

TX.
Blommaert, Jan (2015) “Chronotopes, scales, and complexity in the study of language in society,” Annual Review of Anthropology 44, 105-116.
Blommaert, Jan and De Fina, Anna (2017) “Chronotopic identities: On the timespace organization of who we are,” Diversity and Super-Diversity: Sociocultural Linguistic Perspectives, ed. by Anna De Fina, Didem Ikizoglu and Jeremy Wegner, 1-16, Georgetown University Press, Washington DC.
Clark, Katerina and Holquist, Michael (1984). Mikhail Bakhtin, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge.
De Fina, Anna and Perrino, Sabina (2020) “Introduction: Chronotopes and chronotopic relations,” Language & Communication 70, 67-70.
榎本剛士 (2019)『学校英語教育のコミュニケーション論：「教室で英語を学ぶ」ことの教育言語人類学試論』大阪大学出版会.
Harkness, Nicholas (2014) Songs of Seoul: An Ethnography of Voice and Voicing in Christian South Korea, University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
Hartikainen, Elina I. (2017) “Chronotopic realignments and the shifting semiotics and politics of visibility in Brazilian Candomblé activism,” Signs and Society 5(2), 356-389.
Holquist, Michael (2010) “The figure of chronotope,” Bakhtin’s Theory of the Literary Chronotope: Reflections, Applications, Perspectives, ed. by Nele Bemong, Pieter Borghart, Michael De Dobbeleer, Kristoffel Demoen, Koen De Temmerman and Bart Keunen, 19-33, Academia Press, Gent.
Jakobson, Roman (1971 [1957]) “Shifters, verbal categories, and the Russian verb,” Selected Writings II, 130-147, Mouton, The Hague.
片岡邦好 (2022)「共生と『スケール』: 新型コロナ感染症と『ばい菌』言説」村田和代（編）『越境者との共存にむけて』ひつじ書房, 179-205 頁.
小山亘 (2014)「記号／運動―文字、肖像、増殖、文化、その断片　消えてしまった新しい人へ」『異文化コミュニケーション論集』第 12 号, 45-64 頁.
Morson, Gary M. and Emerson, Caryl (1990) Mikhail Bakhtin: Creation of a Prosaics, Stanford University Press, Stanford.
Nakassis, Constatine V. (2016) “Linguistic anthropology in 2015: Not the study of language,” American Anthropologist 118(2), 330-345.
Nozawa, Shunsuke (2015) “Phatic traces: Sociality in contemporary Japan,” Anthropological Quarterly 88(2), 373-400.
Perrino, Sabina (2021) “Chronotope,” The International Encyclopedia of Linguistic Anthropology Volume I, ed. by James Stanlaw, 157-161, Wiley-Blackwell, Hoboken, NJ.
Silverstein, Michael (1993) “Metapragmatic discourse and metapragmatic function,” Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics, ed. by John A. Lucy, 33-58, Cambridge University Press, Cambridge.
Silverstein, Michael (2005) “Axes of evals: Token versus type interdiscursivity,” Journal of Linguistic Anthropology 15(1), 6-22.
Silverstein, Michael (2007) “How knowledge begets communication begets knowledge: Textuality and contextuality in knowing and learning,”『異文化コミュニケーション論集』第 5 号, 31-60 頁.

Silverstein, Michael (2016) “Semiotics of vinification and the scaling of taste,” Scale: Discourse and Dimensions of Social Life, ed. by E. Summerson Carr and Michael Lempert, 185-212, University of California Press, Oakland, CA.

Wirtz, Kristina (2014) Performing Afro-Cuba: Image, Voice, Spectacle in the Making of Race and History, The University of Chicago Press, Chicago.

Wirtz, Kristina (2016) “The living, the dead, and the immanent Dialogue across chronotopes,” Hau: Journal of Ethnographic Theory 6(1), 343-369.